

三原姉妹 都大路を駆け抜ける

女子第30回全国高校駅伝

7位入賞に貢献

前の選手との差を縮めていく環選手



12月23日、女子第30回全国高校駅伝が京都市内で開催され、男山東中学校出身で立命館宇治高校の三原環選手(2年)と梓選手(1年)が姉妹で出場し、チームの7位入賞に貢献しました。

2区(4・0975km)を任された梓選手は、15位でたすきを受け取ると、前



前の選手を抜き去る梓選手

を走る選手たちを追いしました。差が縮まらず苦しい場面でもピッチを保つことを意識し、四つ順位を上げる日本人区間2位の記録でたすきをつなぎました。

「妹の走りに勇気をもらった」と環選手は、7位でたすきを受け取ると、4区(3km)で粘りの走り。「姉妹で都大路を走ることが応援してくれるたくさんの方の期待に応えたい」と、気持ちの走りで都大路を駆け抜け、区間6位の記録で一つ順位を上げてたすきをつなぎました。

大会を終えて、「はじめての全国高校駅伝は楽しかったです。次こそは優勝と区間賞を目指したい」と梓選手。環選手は「先輩に負けないように初心を忘れずに努力し、次は優勝したいです」と話していました。



スタートを切るランナーたち

青空の下 八幡のまち快走

市民マラソンに1547人

「2018八幡市民マラソン大会」が12月2日、市民スポーツ公園を発着点に開催され、1547人のランナーが八幡のまちを駆け抜けました。

同大会は、体育協会や市などで構成される八幡市民マラソン大会実行委員会が主催。ハーフ、10km、3km、2kmの距離で、性別や年齢別に15部門が設けられました。

ランナーたちは、スターターの号砲とともにスタート。広がる青空の下、息を弾ませながら木津川沿いや工業団地、田園地

帯などを通るコースを駆け抜けました。

親子ペア部門では、小学2年生以下の子どもたちが、保護者と一緒に2kmのコースに挑戦。最後は手を繋いでゴールし、保護者たちは頭をなでるなどして頑張った子どもたちをほめてあげていました。

息子の晴弥くん(7)と親子ペア部門で2連覇を果たした古賀一有さん(39)は「子どもと土日に淀川の河川敷で練習していたので、結果が出てうれしいです」と笑顔で話していました。

まちの話題

このページでは、市民の皆さんの活躍やまちの話題などを紹介しています。身近な話題や広報紙についての意見を、秘書広報課までお寄せください。

市内の小中高生32人が委員となって市をよりよくするためのアイデアを考える「八幡市子ども会議」が12月22日、福祉会館で行われ、委員たちが会議を重ねてまとめた提言を堀口市長に発表しました。

同会議は、立命館大学政策科学部稲葉ゼミと連携して毎年行われており、今年で15回目。委員たちが4グループに分かれ、自分たちで決めたテーマに沿って取材や調査などを重ねてきました。

八幡市子ども会議



市長にアイデアを提言する小学生班

班は、啓発用のオリジナル動画やポスターを制作。子どもから防災について発信し、市民の意識を高めることを提言しました。

ほかにも、オリジナル松花堂弁当を作るイベントや八幡市産の抹茶を使ったいろいろな作り、国籍を超えたスポーツ大会の開催など、さまざまなアイデアが提言されました。

さくら小学校6年生の田中鈴さんは「フィールドワークなどを通していろんな人と交流できて楽しかったです。発表は緊張したけれど、みんな頑張りました」と話していました。

市をよりよく 会議重ね市長に提言

日本の伝統芸能体験

八幡小で能楽巡回公演

12月3日、能楽の巡回公演が八幡小学校で行われ、全児童466人が日本の伝統芸能を鑑賞しました。

同公演は、能楽やオーケストラなど、優れた文化芸術を鑑賞することで、子どもたちに豊かな創造力やコミュニケーション能力を養ってもらおうと、文化庁が全国の小学校や中学校で主催しています。

「狂言構えや「笑い」



「笑い」を体験する児童たち

公演では草風会の能楽師たちが、柿を盗み食する山伏と柿畑の持ち主とのやりとりを描いた狂言「柿山伏」、漁師から羽衣を返してもらったお礼に天人が舞楽を舞う能「羽衣」を上演。

また、6年生の代表12人が舞台上がり、体の重心を落とす狂言の構えや「笑い」などを教わるなど、児童たちは日本の伝統芸能を体験しながら学んでいました。

清水佑馬くん(12)は「能楽は初めて見ましたが、おもしろかったです。狂言の声の出し方も勉強になりました」と話していました。